土左日記論（下）

大橋清秀

五

さて、はじめに土左日記にみえている五十八首の和歌のうち、前にあげた地の文によってよみ手が貫之であると考えられるもの九首、および地の文に和歌のよみ手がだれであるかが記されているもの十八首、計二十七首以外の二十九首の和歌を吟味してみると、

歌順番号	土左日記の地の文	吟味の結果の和歌のよみ手	備考
3	あるひと	貫之	和歌体十種・今昔・宇治拾遺
4		貫之	「また、あるときには、」
6	ゆくひと	貫之	六帖　第三・後撰　三
10	あるひと	貫之	六帖　第三・後撰　十九
11		貫之	六帖　第三
12	ふなびと	貫之	
14	ひと		
15		貫之	「うみをみやれば、」
17	あるひと		
18	あるひと		
19	あるひと		
20	あるひと		
21	ひと		
24	あるひと		
27	あるひと		
31	あるひと		
33	あるひと		
35	あるひと		
37		貫之	
39	あるひと	貫之	「これにつけてよめるうた、」
41		貫之	六帖　第四 「これかれ、くるしければよめるうた、」
43	あるひと	貫之	
45	あるひと		
50	いま、けふあるひと		

51	あるひと	続後撰　十六（よみ人しらず）
53	あるひと	
54	あるひと	
55	あるひと	
56	あるひと	

という結果になったのであるが、二十九首すべての吟味の過程を記すいとまがないので、吟味の結果よみ手が貫之と考えられるものについてのみ述べることにしたい。

3　みやこへとおもふをもののかなしきはかへらぬひとのあればなりけり

この歌は帰京する人が、「かへらぬひと」を悲しんだものであつて、土佐で女の子をうしなつた貫之の歌と考えられる。すなわち、この歌は貫之の立場からよまれているから、地の文にある「あるひと」は、貫之その人ではないかと考えられるのである。

4　あるものとわすれつゝなほなきひとをいづらととふぞかなしかりける

この歌は、前の3の歌につづいて、「また、あるときには、」としてみえているもので、前の3の歌と同じ「あるひと」の歌と考えられるのであるが、この歌の内容は前歌と同様貫之の立場からよまれており、歌のよみ手である「あるひと」は、貫之ではないかと考えられるのである

6　さをさせどそこひもしらぬわたつみのふかきこゝろをきみにみるかな

この歌は、「きみ」に対する歌である。「きみ」とあるのは、前の5の歌のよみ手である「かのひと〳〵」すなわち、「かみのはらから、またことひと」のことと考えられるから、この歌は貫之の立場からよまれたものと考えられる。とすれば、地の文にあるこの歌のよみ手「ゆくひと」は、都へ「ゆくひと」すなわち、貫之のことと考えてよいであろう。

10　てるつきのながるゝみればあまのがはいづるみなとはうみにざりける

この歌のみえている承平五年一月八日の記事をみてみると、「（前略）こよひ、つきはうみにぞいる。これをみて、なりひらのきみの、『やまのはにげていれずもあらなん』といふうたなんおもほゆる。もしうみべにてよまましかば、『なみたちさへていれずもあらなん。』ともよみてましや。いまこのうたをおもひいでて、あるひとのよめりける、」とあつて、この記事に、「これをみて」「といふうたなんおもほゆる」とある主体はだれかというと、次に「いまこのうたをおもひいでて」とある「あるひと」ということになるのである。そして、この「あるひと」がこの歌のよみ手である。そこで、この八日の記事によつて考えてみると、この記事の中には他の人物はだれも登場していないのであつて、この歌のよみ手である「あるひと」は、紀貫之以外には考えられないということになるのである。そして、この歌のあとには、「とや。」とある。

11　おもひやるこゝろはうみをわたれどもふみしなければしらずやあるらん

この歌に、「おもひやる」とある主体は、この歌のよみ手である。そして、「しらずやあるらん」とある相手はだれかということであるが、承平五年一月九日の記事には、「（前略）おほみなとよりなはのとまりをおはんとて、こぎいでけり。これかれたがひに、くにのさかひのうちはとて、みおくりにくるひとあまたがなかに、ふぢはらのときざね、たちばなのすゑひら、はせべのゆきまさらなん、みたちよりいでたうびしひより、ここかしこにおひくる。このひと〳〵ぞこゝろざしあるひとなりける。このひと〳〵のふかきこゝろざしは、このうみにもおとらざるべし。これよりいまはこぎはなれてゆく。これをみおくらんとてぞ、このひとどもはおひきける。かくてこぎゆくまに〳〵、うみのほとりにとまれるひともとほくなりぬ。ふねのひともみえずなりぬ。きしにもいふことあるべし。ふねにもおもふことあれど、かひなし。」とあつて、見送りの人たちである。そして、見送りを受けた人がこの歌をよんだのである。しかも、「かかれど、このうたをひとりごとにしてやみぬ。」とあるのである。この歌のよみ手が貫之と考えられる所以である。

12　みわたせばまつのうれごとにすむつるはちよのどちとぞおもふべらなる

この歌は、前の11の歌につづいてみえているのであるが、承平五年一月九日の記事をみてみると、「かくて、宇多のまつばらをゆきすぐ。そのまつのかずいくそばく、いくちとせへたりとしらず。もとごとになみうちよせ、えだごとにつるぞとびかよふ。おもしろしとみるにたへずして、ふなびとのよめるうた、」とあつて、これだけではこの歌のよみ手である「ふなびと」がだれのことかは明らかでなく、歌の内容からも何ともいえない。「みわたせば」とある主体は、歌のよみ手自身である。この歌の後には、「とや。このうたは、ところをみるに、えまさらず。」とあつて、「とや」とあることに注意するとともに、「このうたは、ところをみるに、えまさらず。」という評言があることにも注意すべきである。この評言を他人の歌に対するものとすれば、率直なものでいかがであろうか。やはり萩谷朴・小西甚一両博士などのように、よみ手自身の歌に対するものと考えた方がよいように思われる。次に、「ふなびと」についてであるが、小西甚一博士は、「同じ船中に居る（または居た）人の意。〔五一〕の例（大橋註六日の記事。二月十一）は、後者。船子とのちがひに注意されたい。ここでは貫之のことをそれとなくさしてゐる。」（土佐日記評解九六頁）と註記しておられるように、すでに記した評言を考慮して、この場合、「ふなびと」は貫之のことと考えられるかと思う。（なお、類歌が六帖第四、および貫之集第一（延喜十五年三月の屏風歌）にみえていることについては、すでに樋口寛氏が指摘しておられる。）

15　くももみななみとぞみゆるあまもがないづれかうみとひてしるべく

この歌に、「くももみななみとぞみゆる」とある主体はこの歌のよみ手である。この歌の前の地の文には、「うみをみやれ

ば、」とあり、この歌は日記の筆者の歌と考えられるのである。とすれば、すなわち貫之の歌ではないかと考えられるのである。

37　ををよりてかひなきものはおちつもるなみだのたまをぬかぬなりけり

この歌の前に、「かぜのふくことやまねば、きしのなみたちかへる。これにつけてよめるうた、」とあつて、これによればこの歌のよみ手は、日記の筆者と考えられるのである。とすれば、貫之の歌ではないかと考えられるのである。

39　わすれがひひろひしもせじしらたまをこふるをだにもかたみとおもはん

この歌の前に、「あるひとのたへずして、ふねのこゝろやりによめる、」とあつて、これによれば、「あるひと」がこの歌のよみ手と考えられるのである。しかし、この歌に、「しらたまをこふるをだにもかたみとおもはん」とあり、この歌の内容から考えると、この歌のよみ手は、子をうしなつた親であることが明らかであり、とすれば、貫之か、貫之の妻かということになるのであるが、土左日記において、女性については、「をんなわらは」（承平五年一月十一日）・「めのわらは」（一月十五日）・「めのわらは」（一月廿六日）・「あはぢのたうめ」（一月廿六日）・「をんな」（一月廿七日・一月廿九日・二月四日）・「をむな」（一月廿九日）・「はは」（二月五日・二月九日）・「おほいご」（二月六日）などと記されており、男性については、「あるひと」・「ゆくひと」・「ひと」などと区別して記されているのではないかと考えられるところから、「あるひと」は貫之ではないかと考えられるのである。

41　ゆけどなほゆきやられぬはいもがうむをづのうらなるきしのまつばら

この歌の前に、「これかれ、くるしければよめるうた、」とあつて、これによれば、「これかれ」すなわち、「誰も彼も」がよんだ歌とする考えと、誰も彼も松原の長さがやりきれなくて、日記の筆者がよんだ歌と考えるのとの二つがあるが、いまわたくしは後者をとり、貫之の歌ではないかと考えるのである。

43　いまみてぞみをばしりぬるすみのえのまつよりさきにわれはへにけり

この歌の前に、「あるひとのよめるうた、」とあつて、これによれば、「あるひと」男性の歌ではないかと考えられるのである。そして、この歌をみてみると、「住吉の松より自分の方が年老いてしまつているのだということを知つた。」とあつて、この歌のよみ手は相当な年配の人と考えられるのである。そこで一行中にそのような人を求めると貫之ということになり、この歌のよみ手は貫之ではないかと考えられるのである。

以上の十一首のうち五首（3・6・10・11・39）は、他書にもその歌がみえているものである。そこで他書にみえている十六首のうち、すでに吟味した八首（21・24・51を含む。）以外の八首（16・28・29・32・38・42・44・46）についても吟味を加えておきたい。

16　たてばたつゐればまたゐるふくかぜとなみとはおもふどちにやあるらん

この歌の前に、「めのわらはのいへる、」とあつて、これによれば、この歌は「めのわらは」の歌ということになり、歌の内容からも変つたことはでてこないが、ただ「めのわらは」の歌としてこの歌をみる時、童の年齢がはたしていくつ位なのかが一寸心にかかる。古今和歌六帖第三には、作者名が記されていないが、これ以上のことは何とも言えないのである。なお、この歌の後には、「いふかひなきもののいへるには、いとにつかはし。」と記されている。

28　わたつみのちふりのかみにたむけするぬさのおひかぜやまずふかなん

この歌の前に、「これをきゝて、あるめのわらはのよめる、」とあつて、これによれば、「あるめのわらは」の歌ということになつている。そして歌に、「わたつみのちふりのかみにたむけする」とあるのであるが、だれがたむけたのかと考えると、「かぢとりしてぬさたいまつらするに、」と前にあつて貫之と考えられるところから、この歌のよみ手は貫之ではないかと考えられるのである。勿論、たむけする人以外の第三者がこのような歌をよんでも何ら差支えないのであるが、歌を厳密によめばこういうことになるのではあるまいかと考えられるのである。

29　おひかぜのふきぬるときはゆくふねのほてうちてこそうれしかりけれ

この歌の前に、「このなかに、あはぢのたうめといふひとのよめるうた、」とあつて、これによれば、「あはぢのたうめ」の歌と考えられる。しかし、歌に、「ほてうちてこそうれしかりけれ」とあることに注意すると、「そのおとをきゝて、わらはもおむなも、いつしかとしおもへばにやあらん、いたくよろこぶ。」と前にあるのを客観的にみてよんでいるかと考えられるのである。地の文にあるように、「あはぢのたうめ」の歌とすれば、自分自身が童や嫗の中の一人でありながら、このような態度でよんでいるのがわたくしには一寸気になる。萩谷朴博士は、「うれしがりけれ」とよんでおられるのであるが（日本古典全書　九〇頁）、この場合、「うれしかりけれ」とある主体はだれかというと、やはりこの歌の作者ということになるのではなかろうか。わたくしはこの歌の下句を、「進んでゆく船が帆を鳴らし、乗つている人々も手をたたいてよろこんでいて、本当にうれしいことだ。」と解している。このような立場で童や嫗の様子を見、歌によむことのできる人を求めると貫之ということになるのであるが、いかがであろうか。なお、この歌の後には、「とぞ。」と記されている。

32　おぼつかなけふはねのひかあまならばうみまつをだにひかましものを

この歌の前に、「あるをむなのかきていだせるうた、」とあつて、これによれば、「あるをむな」の歌ということになる。この歌の内容からは別に問題はでてこない。

38　よするなみうちもよせなむわがこふるひとわすれがひおりてひろはん

この歌の前に、「かかれば、たゞむかしのひとをのみこひつゝ、ふねなるひとのよめる、」とあつて、これによれば、「ふねなるひと」の歌ということになる。ところが、「むかしのひとをのみこひつゝ、」と地の文にあり、歌に「わがこふるひとわすれがひおりてひろはん」とあるのを考えると、「ふねなるひと」は子をうしなつた親であると考えられるのである。そして、この38の歌の次にみえている「あるひと」の39の歌も、すでに述べたように、子をうしなつた親の歌と考えられる。わたくしは、この38の歌も貫之の歌ではないかと考えているのであるが、いかがであろうか。

42　いのりくるかざまともふをあやなくもかもめさへだにな
　　みとみゆらん

この歌の前に、「京のちかづくよろこびのあまりに、あるわらはのよめるうた、」とあつて、これによれば、「あるわらは」の歌ということになる。歌をみてみると、「いのりくるかざまともふを」とある「いのりくる」をことばどおりに解すれば、その主体は貫之ではないかと考えられるのである。勿論、旅の平安を祈つて来たのは貫之のみならず、同行の者すべてがそうであつたであろう。しかし、童が「いのりくるかざまともふを」というのはいかがであろうか。断定的なことはいえないが、わたくしには、やはり貫之の歌ではないかと考えられるのである。

44　すみのえにふねさしよせよわすれぐさしるしありやとつ
　　みてゆくべく

この歌の前に、「ここにむかしへびとのはは、ひとひかだときもわすれねばよめる、」とあつて、これによれば、「むかしへびとのはは」亡き女の子の母すなわち、貫之の妻と考えられるのであるが、古今和歌六帖第六には貫之の歌となつているのである。この古今和歌六帖によれば、土左日記に貫之の妻の歌と記されている歌まで、貫之の歌ということになるのである。

46　いつしかといぶせかりつるなにはがたあしこぎそけてみ
　　ふねきにけり

この歌の前に、「かのふなゑひのあはじのしまのおほいご、みやこちかくなりぬといふをよろこびて、ふなぞこよりかしらをもたげて、かくぞいへる。」とあつて、これによれば、「あはじのしまのおほいご」すなわち淡路の老女の歌ということになる。この歌からは特に問題はでてこない。

なお、続後撰和歌集巻第十六に「よみ人しらず」としてみえている51の歌の内容からは特に問題はでてこないが、参考までにここに記しておく。

51　きみこひてよをふるやどのむめのはなむかしのかにぞな
　　ほにほひける

以上、八首の和歌を吟味した結果を示すと、

歌順番号	土左日記の地の文	吟味した結果の和歌手	歌のよみ	備考
16	めのわらは			六帖　第三(作者名なし)

28	あるめのわらは	貫之か	六帖　第四・新千載　八
29	あはぢのたうめ	貫之か	六帖　第三
32	あるをむな		六帖　第一
38	ふねなるひと	貫之か	六帖　第三
42	あるわらは	貫之か	六帖　第三
44	むかしへびとのは		六帖　第六
46	あはじのしまのおほいご		六帖　第三
(51	あるひと		続後撰　十六（よみ人しらず）)

註　51の歌は前表にも出ている。

ということになるのである。このように二十九首の和歌を吟味した結果、十一首（3・4・6・10・11・12・15・37・39・41・43）が貫之の歌ではないかと考えられ、そのうちの五首は他書にもみえているものである。勿論、他書においても貫之の歌となつている。

次に、他書にみえている残りの八首中、四首（28・29・38・42）が和歌を吟味した結果、貫之の歌かと考えられるのであるが、この四首は土左日記においては、「あるめのわらは」・「あはぢのたうめ」・「ふねなるひと」・「あるわらは」の歌となつているのである。

以上、考察したように土左日記所収の和歌のうち、地の文に「あるひと」「ゆくひと」「ふなびと」の歌とあるものにも、貫之の歌と考えられるものがあることが明らかになり、また地の文に、「あるめのわらは」「あはぢのたうめ」「ふねなるひと」「あるわらは」の歌とあるものにも、貫之の歌かと考えられるもののあることが明らかになつたかと考える。

六

そこで、既述のように土左日記所収の和歌を吟味した結果、貫之の歌かと考えられるもののみえている日の記事を、その和歌を中心に前後の和歌との関係を考慮しながら考察してみたい。まず、それらを整理して示すと、

①承平四年十二月廿七日

和歌体十種 今昔宇治拾遺	歌順番号		吟味の結果のよみ手
	3	あるひと	（貫之）
	4	（また、あるときには、）	（貫之）
	5	かのひと〳〵	
六帖	6	ゆくひと	（貫之）
②承平五年一月八日			
六帖 後撰	10	あるひと	（貫之）〔とや。〕
③一月九日			
六帖	11	（このうたをひとりごとにしてやみぬ。）	（貫之）
	12	ふなびと	（貫之）〔とや。〕
④一月十三日			
	15	（うみをみやれば、）	（貫之）

⑤二月三日

37　（これにつけてよめるうた、）（貫之）

⑥二月四日

六帖　38　ふねなるひと　（貫之か）

六帖　39　あるひと　（貫之）

40　あるをんな

⑦二月五日

41　（これかれ、くるしければよめるうた、）（貫之）

六帖　42　あるわらは　（貫之か）

43　あるひと　（貫之）

六帖　44　むかしへびとのはは

45　あるひと

となり、他書にもみえているもののうち、すでに出た七首以外の28・29の歌を中心にみてみると、

⑧承平五年一月廿六日

六帖新千載　28　あるめのわらは　（貫之か）

六帖　29　あはぢのたうめ　（貫之か）

ということになるのである。

さて、②④⑤は各一首の和歌しかみえていないのであるが、このうち④⑤は、土左日記の筆者がよんだ歌として記されているもののようである。その④の15・⑤の37の二首が貫之の歌とすれば、日記の筆者の立場で、貫之が自作の歌を記したということになるのである。

②の10の歌は、「あるひと」の歌として記されているのであるが、この歌も貫之の歌とすれば、貫之が自作の歌を「あるひと」の歌として記し、しかも、その歌のすぐあとに、「とや。」と記していることになるのである。

次に、①③⑥⑦には二首以上の和歌がみえているのであるが、①の3と6の歌がともに貫之の歌とすれば、貫之が自作の歌をわざと、「あるひと」と「ゆくひと」の歌として記したということになるのである。

③の場合は、11の歌が土左日記の筆者の歌として記されており、これに対して12の歌は「ふなびと」の歌となつていて、この11・12の歌がともに貫之の歌とすれば、貫之が自作の歌をこのようにわざと記したということになるのである。

⑥の場合は、38・39の二首がほぼ同時によまれたことが、38の歌のすぐあとに、「といへれば、あるひとのたへずして、ふねのこゝろやりによめる、」として39の歌がみえていることによつて明らかである。そして38の歌は、「ふねなるひと」の歌となつているのであるが、これに対してよまれたと考えられる39の「あるひと」の歌とともに、子をうしなつたかなしみを歌つたものであり、これらの38・39の歌がともに貫之の歌とすれば、貫之は自作の歌である38の歌に対して、自作の歌である39の歌がよまれたように記していることになり、自作の38・39の二首を、「ふねなるひと」と「あるひと」の二人の人物の歌と

して記していることになるのである。

⑦の41の歌は、土左日記の筆者の歌として記されているようである。42の歌は、「あるわらは」の歌としてみえており、43の歌は、「あるひと」の歌として記されているのであるが、この41・42・43の三首がともに貫之の歌であるとすれば、貫之は自作の三首の歌をそれぞれ、「日記の筆者」、「あるわらは」、「あるひと」の歌として記していることになるのである。

次に、⑧の場合を考察してみると、28の歌は、「あるめのわらは」の歌とされており、29の歌は、「あはぢのたうめといふひと」の歌と記されているのである。この28・29の二首が貫之の歌とすれば、貫之は自作の歌をそれぞれ、「あるめのわらは」、「あはぢのたうめといふひと」の歌として記していることになるのである。

以上、考察してきたように、土左日記に収められている歌が、貫之自身の歌でありながらあたかも貫之以外の人物の歌であるかのごとく記されていると考えられるのである。

それでは、何故貫之は自作の歌を貫之以外の人物の歌であるかのごとくにして記したのであろうか。また、どのような経緯でこのような表現がうまれてきたのであろうか。

そして、土左日記におけるこのような表現は、土左日記の成立と本質とに深いかかわりのあるものと考えられるのである。すなわち、日記物語の発生を考える上に看過してはならない問題であり、この問題を明らかにすることによつて、土左日記の本質、換言すれば日記物語の本質を明らかにすることができるのではないかと考えられるのである。そして、このような土左日記における表現の源を明らかにすることによつて、女性によつて書かれた日記物語の本質とその伝流をも明らかにすることができるのではないかと考えるのである。すなわち、平安女流の日記物語にみられる特殊性は、すでに土左日記においてみられるものではないか。このことをまず明らかにすることができて、しかる後にはじめて日記物語の展開を明らかにすることができるのではないかと考えるのである。

七

このような土左日記における表現が、どのようにしてうまれてきたかを解く一つのよりどころとして考えられるものは、貫之集にみえている屏風歌である。

玉上琢弥博士は「屏風絵と歌と物語と」（国語国文 昭和二八年一月号）と題する論考、および物語文学（塙選書 塙書房 昭和三五年七月刊）において、貫之集第三に、「承平五年十二月、内の御屏風の歌、仰せによりて奉る」としてみえている（貫之集の歌順番号は、萩谷朴博士校註 日本古典全書 土佐日記 朝日新聞社 昭和二五年五月刊に記載のものを参考に記した。）、

330　月夜に女の家に男ゐよりてゐたり　「山の端に……」

331　女返し　「久方の……」

の二首の歌をあげて、「これも物語である。この男女贈答歌は、歌物語の一段に作りあげることが出来る。山の端の月、家の中の女、外なる男、恐らくは秋草を描き加えた絵に、色紙形に書かれた二首の歌。これを見て幼き人が侍女に説明を求めた時、この詞書のように簡単な言い方で終る筈がない。男について女について、二人の関係について、必ずや何ほどかのことを言い述べるであろう。幼い人の問いに答えて、その説明はさらに長くなるであろう。かくして物語となるのである。（中略）貫之集、伊勢集の例のごとく、そしてこの種のものはすべてそうであるが、『男、女』と書いてあることにも注意する必要がある。屏風絵の人物なのだから他に呼びようもないことではあるが、歌物語そのままであり、作り物語とてもそのクライマックスたる男女の出合いの場では、物語の中の呼び名をすてて、この『男、女』という呼称法となる。大臣上達部であっても『男君』であり、どの姫君も『女君』となる。ここに屏風絵・屏風歌から歌物語・作り物語を通ずる系譜が認められるのである。」（同書一一九・一二〇頁）と述べておられるのは注目すべきである。

今、貫之集所収の屏風歌のすべてを考察する余裕はないが、詞書の中に人物が登場してくるものを、はじめから順次五首かかげて考えてみることにしたい（貫之集の本文は、便宜上萩谷朴博士校註日本古典全書本により、飯島春敬氏・久曽神昇博士共著　国宝西本願寺三十六人集　越後屋書房　昭和一九年四月刊によって校異を示しておいた。）。

延喜十三年十月十四日、尚侍の四十の賀の屏風の歌、内裏の仰せにて奉る

野に人あまたあるところ。秋

23　招くとて来つるかひなく花薄穂に出でて風のはかるなりけり

道行く人の馬よりおりて、岸のほとりなる松の
もとにやすみて、波のよるを見たるところ

28　われのみや影とはたのむ白波もたえずたちよる岸の姫松

延喜十五年閏二月廿五日、斎院の御屏風の和歌、
内裏の仰せによりて奉る

女ども滝のほとりにいたりて、あるは流れ落つるを見、
あるは手をひたして水に遊べる

44　春来れば滝の白糸いかなればむすべどもなほ泡になるらん

人の木の下に休みて河ごしに桜の花見たる所

46　をちかたの花も見るべく白波のともにやわれはたちわたらまし

旅人の道にありて
道行く人の帰る雁の雲をわけたるをみるわたるを見たるところ

47　ねたきこと帰るさならば雁が音をかつ聞きつつぞわれは行かまし

右に記したごとく、貫之集所収の屏風歌の詞書に、「野に人あまたあるところ。秋」というように、「人」またはこれに類する人物のみえているものが貫之集の第一から第四までにみえてい

る屏風歌五百三十九首（萩谷朴博士校註　日本古典全書所収貫之全歌集による。）のうち百例あまりあるのである。そこで、これら五首の屏風歌について考察してみることにする。

23詞書に「野に人あまたあるところ。秋」とあつて、この歌は、屏風絵の中の「人」の立場でよまれたものである。歌に、「招くとて来つるかひなく」とある「来つる」人は、屏風絵の中の人物である「人」であつて貫之自身ではないのである。すなわち、貫之は絵の中の人物の立場になつて、この歌をよんでいるのである。

28詞書に、「道行く人の馬よりおりて、岸のほとりなる松のもとにやすみて、波のよるを見たるところ」とあつて、これも「道行く人」の立場でよんだものである。そして、歌に、「われのみや」とある「われ」は、「道行く人」自身であつて、貫之ではない。

44詞書に、「女ども滝のほとりにいたりて、流れ落つるを見、あるは手をひたして水に遊べる」とあつて、これは、「女ども」の中の女の立場でよんだものである。

46詞書に、「人の木のもとに休みて河ごしに桜の花見たる」とあつて、「人」の立場でよんだものである。そして、歌に、「われはたちわたらまし」とある「われ」は、屏風絵の中の「人」自身であつて、貫之ではない。

47詞書に、「道行く人の帰る雁のわたるを見たるところ」とある「道行く人」の立場でよまれたものである。そして、歌に、「かつ聞きつつぞわれは行かまし」とある「われ」は、屏風絵の中の「道行く人」自身であつて、貫之ではないのである。

以上、考察したように五首すべてが、屏風絵の中の人物の立場からよまれたものであることが明らかになつたかと考える。

次に、貫之集の屏風歌第一から第四までの五百三十九首の中に、四組の贈答歌がみえているのである。このうちⅠの330・331の二首は玉上琢弥博士の論考に引用されているものである。

Ⅰ　第三

六帖　第五　近くてあはず　風雅　十五

330　月夜に女の家に男ゐよりてゐたり（をとこいたりてすのこにゐてものいはせたり）
山の端に入りなんと思ふ月見つつわれは外ながらあらんとやする

女返し

風雅　十五

331　久方の月のたよりに来る人は到らぬところあらじとぞ思ふ

Ⅱ　第四

六帖　第四　別　古今　九

428　旅出で立ちするところにある女ども、別れ惜しめる
惜しみつつ別るる人を見るときはわが涙さへとまらざりけり

六帖　第四　別

429　出で立つ人の返し
思ふ人とどめて遠く別るれば心行くともわが思

はなくに

430 かねてより別れを惜しと知れりせば出で立たんとは思はざらまし

Ⅲ

男、女の家にいたりてとぶらひたる

431 草も木もありとは見れど吹く風に君が年月いかがとぞ思ふ

返し、女

432 桜花かつ散りながら年月はわが身にのみぞ積るべらなる

Ⅳ

梅の花のもとに、男女群れゐつつ酒のみなどして、花を折りて、うちなる人のやれるまれに来て折ればやあかぬ梅の花つねに見る人いかがとぞ思ふ

515

返し

516 宿近く植ゑたる梅の花なれど香にわが飽ける春のなきかな

そこで、これらの贈答歌を考察してみたい。

Ⅰ 330詞書に、「月夜に女の家に男ゐよりてゐたり」とあつて、これは、「男」の立場からよまれた歌である。そして、歌に、「われ」とあるのは、絵の中の人物である「男」自身であつて、貫之ではない。

331詞書に、「女返し」とあつて、「女」の立場からよまれた歌である。そして、歌に、「久方の月のたよりに来る人は」とある「人」は、330の「男」をさしているのであつて、「とぞ思ふ」とあるのは、この歌のよみ手である「女が」である。すなわち、絵に描かれている「女の家」の「女」の立場からよまれたものであつて、貫之の立場からよまれたものでないことは明らかである。なお、これは、「承平五年十二月、内裏の御屏風の歌、仰せによりて奉る」とある中にみえているものである。

Ⅱ 428詞書に、「旅出で立ちするところにある女ども、別れ惜しめる」とあつて、「女ども」の立場からよまれた歌である。そして、歌に、「わ」とあるのは、この歌のよみ手である「女」自身であつて、貫之ではないのである。また、「惜しみつつ別るる人」とは、「旅出で立ちする」人をさしていると考えられる。

429詞書に、「出で立つ人の返し」とあつて、「出で立つ人」の立場からよまれた歌である。そして、歌に、「わ」とあるのは、「出で立つ人」自身であつて、貫之ではない。ここに、「思ふ人」とあるのは、「旅出で立ちするところにある女ども」をさしていると考えられる。

430の歌に、「かねてより別れを惜しと知れりせば」、「出で立たんとは思はざらまし」とあるのは、すべて、「出で立つ人」自身のことであつて、貫之のことではないのである。なお、これ

は、次の431・432の歌とともに、「おなじ年（大橋註 慶二年。天）、宰相の中将の屏風の歌、廿三首」とある中にみえているものである。なおまた、西本願寺本には、第四の歌全部がない。

Ⅲ 431の詞書に、「男、女の家にいたりてとぶらひたる」とあつて、これは、「男」の立場からよまれた歌である。そして、歌に、「とぞ思ふ」とあるのは、屏風絵の中の「男」自身のことであつて、貫之のことではないのである。また、「君」とあるのは、「女の家」の「女」であると考えられるのである。

432詞書に、「返し、女」とあつて、これは、「女」の立場からよまれた歌である。そして、歌に、「わが身」とあるのは、「女」自身のことであつて、貫之のことではないのである。なお、これは、前の428・429・430の歌とともに、「おなじ年、宰相の中将の屏風の歌、廿三首」とある中にみえているものである。

Ⅳ 515詞書に、「梅の花のもとに、男女群れゐつつ酒のみなどして、花を折りて、うちなる人のやれる」とあつて、これは、「男女群れゐつつ酒のみなどして、花を折りて、」とある「男女」の中の何人かの立場からよまれたものと考えられるのであるが、この詞書のみではそのうちの男か女かについては明らかではない。なお、「うちなる人のやれる」について、萩谷朴博士（日本古典全書 頭註）は、「『うちなる人に』が正しいか。または『うちなる人のもとに』などの略されたものか。」とされている。しかし、歌に、「まれに来て」「折ればやあかぬ」「いかがとぞ思ふ」とあるのは、この歌のよみ手自身のことであつて、貫之ではない。

516詞書に、「返し」とあつて、この歌は前の515の歌に対する返歌である。歌に、「宿近く植ゑたる梅の花なれど」とあるところから、前の515の歌に、「梅の花つねに見る人」とあるのと照応していて、516の歌のよみ手は、「梅の花つねに見る人」であることが明らかである。そして、516の歌に、「わ」とあるのは、この歌のよみ手自身のことであつて、貫之ではないのである。この515・516の歌のよみ手については、歌の内容などから515の歌は男性、516の歌は女性ではないかと推測されるのであるが、いかがであろうか。なお、これは、「おなじ年（大橋註 慶五年。天）九月、内裏の御屏風の歌、五首」とある中にみえているものである。

なお、ⅡⅢと同じ時の屏風歌の中の「月に琴弾きたるを聞きて、女443・444」「男445」は贈答歌とも考えられるが、除外した。

以上、貫之集の屏風歌にみえている四組の贈答歌を考察した結果、そのすべてが屏風絵の中の人物の立場からよまれたものであることが明らかになつたかと考えるのである。

このように、貫之は屏風歌をよむに際して、屏風歌の一般にしたがつて屏風絵にえがかれている画中の人物の立場から歌をよみ、なかんずく、屏風歌にみえている贈答歌においては、贈歌と返歌の双方の人物のそれぞれの立場になつてよんでいるのである。

そこで、屏風歌にみえている四組の贈答歌のよまれた時期を詞書によつて調べてみると、

330・331	承平五年十二月	西紀 九三五
428・429・430	おなじ年（天慶二年）	九三九
431・432	おなじ年（天慶二年）	九三九
515・516	おなじ年九月（天慶五年）	九四二

となつており、貫之集の詞書を信ずれば、330・331の歌のよまれた承平五年十二月は、紀貫之が土佐から帰京した承平五年二月十六日と同じ年のことになるのである。わたくしは、紀貫之が土左日記を書いたと考えられるころに、このような屏風歌がよまれていることは注目すべきことではないかと考えるのである。

八

前述したように、紀貫之が屏風歌の画中の人物の立場になつて屏風歌をよみ、また、屏風絵の画中の人物である男女それぞれの立場から贈答歌をよんでいることは、土左日記において、貫之が自作の和歌をいろいろの人物がよんだ歌のように記している構成に通ずるのではないかと考えられるのである。そして、このような構成は物語的な構成とも言い得るものではないかと考えられるのである。

このような構成は偶然にできたものではなくて、紀貫之が意図した結果であると考えられる。すなわち、紀貫之は土左日記に旅中の贈答歌や自作の和歌を入れ、所懐を自由に記したいと思つたのであつた。そして、まず土佐守の任務をはなれて帰京する貫之とこれを送る新土佐守たちとの贈答歌が土左日記に記されている。この「あるじのかみ」（1）と「さきのかみ」（2）の贈答歌の記されたのが、土左日記に和歌が書かれたはじめであつた。そこで、承平四年十二月廿六日の記事をみてみると、この1・2の贈答歌を中心に書かれているのである。そして、これ以後の和歌の記されている日の記事をみてみると、すべて和歌を中心として書かれているのであつて、和歌のみえている日の記事はそれぞれ和歌を中心に一つのまとまつた歌物語のごとき趣を呈しているのである。そこで、土左日記においては、一人の人物を一貫して書くということに対する配慮よりも、それぞれの日のいわば小単位の記事の中における和歌のよみ手が、どのような立場の人物であつたかを明らかにすることの方に心が注がれたのではないかと考えられるのである。このように考えてくると、貫之自身のことが、「さきのかみ」「あるひと」「ゆくひと」「ふなびと」「ふねのをさしけるおきな」「ふなぎみなるひと」「ふなぎみ」「ふなぎみの病者」などとさまざまに記されている事情が理解できるのではないかと考える。

次に、このように貫之が自分自身のことを記しているということは、自分自身を客観視しているということになるのであるが、それは、たとえば物語の中の登場人物の一人と自分自身を認識しての上ではなくて、あくまでもその和歌のよみ手がだれかを明らかにしたいためであつて、1の歌が「あるじのかみ」の歌であるのに対して、「さきのかみ」（2）の歌と記したのにすぎないのではないかとわたくしは考えるのである。

そして、土左日記を通じてみられるこのような発想は、紀貫之が多年手がけてきた屏風歌からひき出されたものではないかとわたくしは考えるのである。というのは、1・2の贈答歌の場合は、新旧土佐守の贈答歌としてよまれたものと考えられるところから問題はないように考えられるのであるが、すでに明らかにしたように、貫之の歌と考えられるものがさまざまの人の歌として土左日記に記されている事実をどのように考えるかである。

これについては、貫之集所収の屏風歌にみえている贈答歌四組が、承平五年十二月から天慶五年までの間につくられていることに注意したいのである。すなわち、貫之が屏風絵の中の男女それぞれの立場から贈答歌をよんでいるように、自作の歌を土左日記の記事の中でそれぞれの人の歌として記したのではないかとわたくしには考えられるのである。屏風歌の贈答歌の発想が、土左日記の中で生かされたのではないかと考えるのである。

そして、たまたま貫之集所収の屏風歌の中にみえている贈答歌が承平五年十二月のものがはじめであることにも偶然以上のものを感ずるのである。土左日記は貫之が土佐から帰京した承平五年二月十六日から一、二年のほどに書かれたのではないかとわたくしは推測しているのであるが、とすれば、ほぼ同じ時期である承平五年十二月に屏風歌にみえている贈答歌がよまれていることになり、この屏風歌にみえている贈答歌の発想が、土左日記に及ぼされたと考えてもよいのではないかと考えるのである。

はやくから樋口寛氏・石川徹氏・萩谷朴博士・小西甚一博士・中田祝夫博士・鈴木知太郎博士をはじめ諸先学によって、この問題が指摘され、考察されてきたのであるが、わたくしは、以上、考察したように土左日記にみられる構成を素朴なものと考え、その源を屏風歌における贈答歌の発想にみとめたのである。

以上、考察したごとき事柄がみとめられるとすれば、草がなによって書かれた私（わたくし）の日記の最初の作品と考えられる土左日記に、すでにこのような物語的な構成がみられるということになり、いわゆる日記文学は、その発生においてすでに物語的な構成をも持っていたということになるのである。そして、従来「戯曲的構成」と称されてきた土左日記におけるこのような構成を、わたくしは、「物語的構成」として考えてゆきたいのである。

真名によって書かれた私の日記は、このような物語的な構成を持っていない。しかし、土左日記においては真名による私の日記にみられるような記録性と、すでに述べたごとき物語性とをともに持っているのである。ここに土左日記の本質を認めるとともに、土左日記の文学性を認めるのである。

そして、いわゆる女流日記文学の作品がともに持ちあわせている文学性は、日記文学の作品の最初から一貫してみられるものであったのである。いいかえれば、かげろふの日記や和泉式

部日記、更級日記などに特にみられる現象でないことが明らかになつたかと考えるのである。

そしてまた、これら日記文学における文学性は、和歌と不即不離の関係を保ちながら発展してきたのであり、以上、考察してきたところによつてその事情の一端を明らかにすることができたかと考えるのである。

ここで、一言触れておきたいことは、土左日記にみえている五十八首の和歌のうち、阿倍仲麻呂（23）と在原業平（49）の二首以外の五十六首の和歌は、貫之集には一首もみえていないことである。これは、原貫之集（自撰本）が貫之によつてあまれた時、旅中の和歌がすでに土左日記に収めてあるところから、土左日記所収の和歌をあらためて貫之集に記さなかつたのではないかとも考えられるのである。とすれば、貫之は土左日記を一つの和歌の集のごときものともみとめていたということになるのである。そしてまた、当時の人たちにも土左日記が貫之の和歌の集とも考えられていたところから、土左日記に収められている和歌が一首も貫之集（他撰本）に引かれなかつたのではないかと考えさせられるのである。このことは、旅中の和歌の手控えのようなものが土左日記の素材になつたのではないかというわたくしの考えを裏づけるものとも考えられるのである。そして、土左日記は本来そのような性格を持つているものでもあつたのではないかとわたくしには考えられるのである。

最後に、「日記」という語が、平安時代においてはいわゆる真名日記におけるがごとき、事実の記録という意味の語としてのみ用いられていたのではなく、「日記す」（書き記す）というように動詞として用いられているように、「書き記したもの」という意味の語としても用いられていたのではないかということについて考えてみたい。

これについては、唐風文化から国風文化へ、真名文学の時代からかな文学の時代への推移が考えあわされるのである。すなわち、「日記」という漢語が、国風文化の発展とともに、「日記す」というように国語化されて用いられるようになり、国語化したことばとして「日記」という語が、草がなによつて書かれている日記文学の作品の中に用いられているのではないかとわたくしは考えているのである。

「物語」は第三者がものがたるものであつた。いわゆる日記文学――わたくしのいう「日記物語」――は、自分自身が身ものがたりなどを書き記すものであつたのである。わたくしは、日本文学史研究において、日記文学に物語的性格を認めて、「物語」という文学形態の中に位置づけることを提唱しているのであつて、日記文学を作り物語・歌物語をはじめ物語の諸形態と全く同一の性格のものと考えていないことは言うまでもないことである。

そして、以上、考察したような本質を持ついわゆる日記文学が、草がなによる文学である作り物語や歌物語とほぼ同じ時期に発生していることをみすごすことはできない。すなわち、土

左日記は草がなによる文学の発生・展開の気運とともにうまれでてきたものであつて、時代の趨勢のしからしむるところでもあつたのである。

——三九・五・一三——

附記

小稿を古稀を迎えられた清水泰先生にたてまつる。

土左日記論（上）　正誤表

頁	段	行	正	誤
七	上	2	20・26・	26・
八	上	1	…とて、よめりけるうた	…よめりけるうた
		2	八例	九例
		2	38・51	38・44・51
		10	…ば、いへるうた	いへるうた
		12	…て、かくぞいへる	かくぞいへる
		19	ところにたる	ところににれる
一〇	上	10	和泉式部日記	和泉式郎日記
		21	みてみると、	みてみる、と
一二	上	13	（日本文学叢話会編　古典文学の探究　昭和一八年六月刊　成武堂　昭和一）（古典文学の探求　昭和一八年六月刊）	

なお、八頁上段の土左日記に収められている和歌のすぐ前の地の文の調査のうち、

2行目　二(1)　…のよめる　の中に入れられている44は、
　　…ばよめる　一例（44）に、

7行目　二(5)　よめるうた　の中に入れられている六例は、
　　…て、よめるうた　五例（8・17・34・37・53）
　　…ばよめるうた　一例（41）に、

訂正、よつて九頁上段13行目の「…をみてよめる」（八例）、14行目の「…てよめる」（六例）、15行目の「…ばよめる」（二例）を削除させていただきます。